

続・ 珈琲の思い出 31

鈴木優子

額にキスをされたただけだというのに、優子は頭のとっぺんから身体の真下、尾骨まで一気に痺れが走って腰が砕けそうになってしまった。

どうしよう？ このままではまずい。

もう和樹の顔をまともに見てはいけない。

ここで今すぐに彼から離れなくては……。

と、思いをめぐらせていると、

「ポーン♪」と優子のメールの着信音が鳴った。

「あ、ごめんなさい！私、もう本当に帰らないと！」

そう言つて、和樹の身体を軽く離すと、優子はタクシー乗り場まで早足でかけよつた。

「ごめんなさい。和樹さん、今日は本当に楽しかったです。おやすみなさい。」

和樹が手を中途半端な位置まで上げて、小さく振るのが目に入ったが、優子は構わずタクシーに乗り込んだ。

「K町の交差点までお願いします」と運転手に告げると、

優子は沸き上がる自分の感情にひたすら耐えた。

どうしよう。どうしよう。和樹に好きだと告白して、

その返事がキスだということは……。

しかも、私、こんなに感じてしまつて、どうしよう……？

そこで慌てて携帯のメールを確認すると、夫の義弘からだつた。

【件名】…僕です。【本文】子供たちはお義母さんのうちに迎えにいって来たよ。優子ちゃんもあまり遅くならないように帰っておいでね。」

優子は今夜の出来事を夫から見透かされているような気がして、胸の鼓動が速くなったが、急いで返信した。

「ありがとう。もうタクシーに乗ったからあと15分で帰るよ。」(続く)